

国立教育政策研究所第27回研究公開シンポジウム

「学士課程教育の構成と体系化」 参加報告

法学部 中山 雅司

1. シンポジウム概要

① 日時： 2008年8月30日（土） 13:30～17:30

② 会場： 文部科学省講堂

③ プログラム

主催者挨拶 近藤信司（国立教育政策研究所所長）

基調報告 久保公人（文部科学省大臣官房審議官）

特別講演 「大学の教育力—変革の可能性—」

金子元久（東京大学大学院教育学研究科長）

パネルディスカッション「学士課程教育をどう具体化するか」

「初年次教育の広がり」と学士課程教育」

川島啓二（国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官）

「カリキュラム改革と学習目標の明示—ICUの事例から—」

日比谷潤子（ICU学務副学長）

「学士課程における学習成果のアセスメント」

川嶋太津夫（神戸大学大学教育推進機構教授）

2. 内容の総括と感じた点

○まず、久保氏の基調報告では、今回のシンポジウムのテーマでもある学士課程教育が議論されるようになった発端と経緯についての概要説明があった。すなわち、近年の少子化やグローバル化に伴う大学教育の高度化、個性化、活性化の流れの中で、平成3年の大学設置基準の大綱化を発端とし、最近では平成17年の中教審の「将来像答申」を受けて、各大学に社会における大学の存在意義とそのため学士課程のあり方、質の向上について再考が迫られるようになったとの話があった。そこでは、入り口におけるユニバーサル化への対応の問題と、出口管理（アウトカム）の2つが重要な課題として提起されるとの指摘があった。

○各報告者の報告内容は、レジメの通りであるが、とくに金子講演を中心に述べたい。

金子講演で、「今という時は高等教育の転換点にあり、戦後50年は量的拡大の時代であったが、エリート、マス、ユニバーサルの段階的發展が完了し、新しい歴史の始まりの時期にある。そこにおける焦点は質である。これは日本だけでなく国際的な趨勢である」と

の指摘があったが、この見解については、今なぜ学士課程教育かについての近視眼ではない長期的で本質的な視座を提供するものであると感じた。そして、質的転換のための3つの焦点として、①教授・学習過程、②レリバンス、③大学に対する評価・統制をあげ、それぞれについて分析・検討がなされた。

とくに、レリバンスに関して、「意味のあった授業」についてのアンケート結果で、学問の基礎・意義や将来に役立つ知識技能を教えてもらえたという項目について高いポイントを示したのに対して、「最先端の研究成果を披露した」授業（フンボルト型と呼ぶそうで大学教員に多い考え方であるとの説明があった）については、低いポイントであった点が興味深かった。もちろん、研究と教育は連動するものではあるが、学生のタイプやニーズをよく把握したうえで、大学4年間で学生に何を身につけさせるのかを明確にし、授業を個々の教員の持ち物としてとらえるのではなく、学部や学年、大学全体としての体系的な取り組み、すなわち金子氏の言葉を用いれば「学士課程教育のガバナンス」が一層求められていると感じた。

それに関連して、現代的レリバンス形成の条件として、大学教育では「広い意味での教養」を身につけさせることが必要であり、そのひとつとして「専門中核学力」という概念が提示された。これは、意欲やコミュニケーション能力などの「基礎能力」、および自己・社会認識と学習の位置づけなどの「視野拡大と動機付け」とあわせて、学士課程教育全体を構成するものとされる。この能力は、専門知識に加え、ものを考え、問題点をみつける力などを指しているが、これらは専門教育の中で身につけさせることは十分に可能であり、むしろ何らかの専門的分野の学習を通じてえられるものであるとの指摘があった。このことは、リベラルアーツの意味や一般教養と専門教育のあり方や関係性を考える上で重要であると感じた。また、私も体験したが、アメリカなどでは書かれたものを通じてより、口頭でのやり取りを通じてこうした能力を身につけていることも指摘され、授業方法のありかたについても、さまざまな改善、工夫が求められると感じた。

さらに、評価・統制に関して、学習成果の評価による統制モデルよりも学習プロセスの評価を重視すべきとの指摘があった。この点については、アウトカムアセスメントを重視する神戸大学の川嶋氏との間に意見の対立が見られたが、学習プロセスの評価を行うためには、恒常的な学習過程のモニタリングが必要であり、本学でも課題となっている授業時間外の学習時間をいかに増やすかの検討に当たって、授業以外での学生の行動も含めた調査、分析も視野に入れる必要があると感じた。最後に金子氏は、大学生の学力標準（「学士力」等）は非現実的としたうえで、当面必要なこととして、大学の自律的改革の支援や大学間組織の育成等をあげていた。

○日本における初年次教育の現状についての全国の大学学部調査の結果に基づいて、初年次教育と学士課程について述べた川嶋氏の報告も興味深かった。私も本学法学部の初年次教育に関して、このアンケート調査に回答したが、ユニバーサル化時代において、入学者

の「学力」と「意欲」が不足する一方、大学教育への「移行」と「適応」がますます困難になっている状況において、学びの動機付けや習慣形成に向けて、初年次教育のあり方を学士課程全体のなかで適切に位置づけることが一層重要になっていることが強調された。

○また、本年度から大幅なカリキュラム改革に踏み切った ICU の日比谷氏からは、教学改革についての事例紹介があった。私も ICU で非常勤講師を務めた経験から、これまでの制度やカリキュラムについてはある程度認識していたが、今回かなり思い切った改革を行ったことを知った。周知の通り、これまで ICU は、教養学部 1 学部体制ではあったが、学科がかなり専門化していたともいえ、入学時から 6 学科のいずれかに所属して学ぶシステムであった。それを今回の改革でその壁を取り払い、学生に高い自由度を認めて、入学後に 31 のメジャーから自分の学びを組み立てられるようにした点に特徴がある。その成否が明らかになるまではある程度の時間を要するものと思われるが、学生はアカデミックプランニング・エッセイと呼ばれるいわゆる学習計画書を入学直前も含めて 5 回にわたって執筆、提出することが求められていたり、それをバックアップするためのアカデミックプランニング・センターの設置や教員アドバイザーによる指導など、学生のアカデミックプランニングをフォローするきめ細かい体制がとられていることも記しておきたい。

○神戸大学の川嶋氏からは、「学士課程における学習成果のアセスメント」とのテーマで報告があった。これは、「何を教えたのか」から「何ができるようになってほしいのか」へと高等教育が変化するなかで、アウトカム重視のアプローチが求められるようになっていくとの視点から、中教審が示すような一定の学士力に照らしたアセスメントが必要となってくるという考えである。これについては、先に述べたように、金子氏との間で見解についての隔たりが報告後のパネルディスカッションの場でも見られた。

3. 質疑応答

パネルディスカッションにおける質疑応答でも、興味深い質問がさまざま提起されたので、以下に列記する。

●金子氏に対して

Q. なぜ、授業外学習が確保できないのか。

A. 日本の大学では履修する科目数が多いこと、大学は研究成果を開陳する場であるとの古い考え方が依然として残っており、学生に何をどのように学ばせ、習得させるかについての合意形成や方法の検討が不十分であること、等。

Q. プロセス評価を重視すると述べられたが、どう評価するのか。

A. ・プロセス評価については、まだ日本でも始まったばかりである。

・質の向上には量の拡大に費やした 50 年と同様に 50 年ぐらいかかるかもしれない。

- ・アウトカムについての客観テストを行ったり、財源を与えるなどしたら、その準備のための大学教育になり矮小化される恐れがある。

Q. 教育プログラムと教員組織の関係

- A. どういう教育プログラムの体系を構築するかにもとづいて、カリキュラムや組織をガバナンスしていくことが大事。

●川島氏に対して

Q. リメディアル教育についてどう位置づけるか

- A. 審議会のまとめとしては、高校教育の一部であり、大学教育の一部と位置づけるのは適切ではない。しかし、実際にはリメディアル教育と大学教育が入り混じっている。

Q. キャリアデザインと初年次教育の関係

- A. キャリア教育が将来をみすえた大学での教育・学習の一環とすれば、両者は問題意識としては類似している。

●日比谷氏に対して

Q. 改革にいたった経緯について

- A. よく ICU について、教養教育というと専門がないという誤解があるが、リベラルアーツとは、広く学ぶという視点と共に、ひとつの分野を深く学ぶことという要素が含まれる。そのために、メジャーをじっくり選ばせようとしたのが今回の改革の趣旨である。

Q. 改革によって教員組織はどうなったのか。

- A. 16 の department に分かれ、そこに所属する形に。1つの department に6～12人の教員が所属。

Q. 配布のシラバスをみるとスキル重視のようだが。

- A. 配布したシラバスを書いた教員の個性の部分もあるが、同時に ICU の目標として生涯学び続けられる人材の育成というのを掲げている。よって、知識も大事だが、学び方を学ぶという点でスキルも重視している。

●川嶋氏に対して

Q. プロセスについてどう考えるか

- A. プロセスとアウトカムは連動している。プロセスの評価には、一定のアウトカムが

必要。

Q. インputは多様なので、アウトカムも多様ではないか。それを標準化できるのか。

A. そうだが、一定のスタンダードは求められている。

Q. アウトカム重視だとそのための準備教育になるのでは。

A. どういうアセスメントを導入するかで、教育内容、方法も違ってくる。アセスメントは、いい意味でも悪い意味でも教育の中身を変えていく性格を持っている。

4. 今後の（法）学部教育の課題として感じた点

- ・初年次教育のさらなる充実と改善
- ・コース制のさらなる充実と改善
- ・学部として学生に何をどう教えるかについての、教員間のさらなる合意形成と目標設定、体系化の必要性、そのための授業内容、方法の検討
- ・学習プロセス評価およびアウトカムアセスメントについての議論、そのための学生の実態、ニーズの把握
- ・授業外学習時間の確保の意義と方法についての議論と実行、
- ・アドバイザー制度、オフィスアワー制度の充実についての検討
- ・その他